

の期待は弱まり、よりキリスト教的な人間観に集中するようになったというものである。

ニーバーの初期の著作から中期に書かれた主著にかけての現実主義を巡る議論の展開を概観して分かるのは以下のことである。『道徳的人間と非道徳的社會』において「現実主義」は社会の不正義が権力の不均衡に由来し、その是正に倫理的な要請は無力であり政治的、経済的な強制力が必要であるといった想定が込められている。この態度は、社会状況の考察と人間性の神学的な理解という二つの極に基づいている。この時期のニーバーの主要な問題関心は、不平等の是正、そしてその手段としての「階級闘争」に向かっていた。そこでは社会状況の分析が前面に現れ、人間性の理解がその闘争の冷酷さを和らげるという、いささか補助的な役割をあてがわれている。

しかし、彼の中期になると、その社会状況の考察と人間性の理解との関係は逆転する。人間性の、特に罪の理解が深められ、社会状況の考察はその人間の罪深さから引き出される。人間は罪深いゆえに正しい共同体倫理を形成することができず、力の均衡論が最も妥当な政策として主張されるのである。

千葉眞氏は、ニーバーによる現実主義の展開について、第二次大戦前は社会的弱者の視点から社会を批判する下からの現実主義、大戦後はアメリカ国家に対してその高慢さを批判する上からの現実主義と、その変化を指摘している。千葉氏はこの違いを、ニーバーが戦後、国務省の対外政策の顧問をするようになった立場との関係において捉えているが、今後、こうした視点とニーバーの思考構造の変化との関連に着目して、第二次大

戦後のニーバーの現実主義に関する議論について研究を進めたい。

リタ・バセにおける「聖なる怒り」

伊原木詩乃

「主なる神は人に命じて言われた。『園のすべての木から取つて食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう』（創世記二・一六一七）。楽園の住人アダムとエバに禁じられた知、すなわち善悪の知識とは、善から悪まで一切を知ることを意味する。それは神にのみ属する領域であり、キリスト教世界では、この実を食するような試みは自己神化だと糾弾され、厳しく禁じられた。

しかし、精神療法家アリス・ミラーは、善悪の区別を知らずにいることを理想状態と認め、従順と無知を条件に至福を約束するような楽園を、「闇教育」の産物として徹底的に批判する。闇教育とは、子どもの意志を挫き、公然と、あるいは一見それとわからないように、力を振るい、操り、脅迫して、子どもを従順な臣下に変える狙いをもつて行なわれる教育である。ミラーにとつて知を禁じる残酷な脚本は、まさに闇教育の原則に則つて教育された人間によつて書かれたテクストである。聖書テクストを記した詩人たちの父親は、例外なく、子供たちの発見欲を喜ばず、不可能なことを期待し罰する父親だった。そのた

め詩人たちは無意識の内に、自立を禁じるサディスティックな神を創り出したのである。

リタ・バセは、自分自身の物語、感情、欲求に誠実なミラーの思想に影響を受けた現代イスの神学者である。バセは、西洋キリスト教社会で怒りが抑圧される傾向にある事実を指摘する。墓碑に一般的に次の二節が選択されることに、バセは驚きを隠せない。「主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」（ヨブ記一・二二）。これは自分の子供全員を亡くしたヨブが発した言葉である。この言葉の裏には、自己自身の怒りを正当なものだと認めることへの恐れが存在している。「無垢な正しい人で、神を畏れ、悪を避けて生きている」（一・八）人間の内で、湧き上がる怒りは〈不当な〉ものとして検閲され、無意識に抑圧される。行き場のない人間の怒りは、神の怒りへとすり替えられ、偽装されて再び表面化する。つまり、検閲され押さえつけられた怒りが、人間の内で〈罰せざにはいられない神〉・〈無意味に残忍な神〉という戯画化された神観を形成するのである。

「見よ、わたしは訴えを述べる。わたしは知っている、わたしは正直なのだ」（ヨブ記一三・一八）。ヨブは遂に、自らの怒りを正当なものとして受け入れるに至る。怒りの自己検閲を脱したヨブが自覚し得た事実を、バセはこう理解する。「私の生命よりも重要なものがある。それは、私の語る権利、つまり、私の真実への権利、私の正義を要求する権利である」（『聖なる怒り』九一頁）。私の手で「私であること」を殺してしまう、「私の真実」を私の内で窒息させるより、生命を賭けてでも他

者の前で表明しようとする決意の怒り、それがバセの「聖なる怒り（sainte colère）」に他ならない。聖なる怒りが真実を語ろうと決意するのは、他の誰にもそれができないからである。だが、「私の」真実は、全能ではありえない。「偽りを捨て、それぞれ隣人に對して真実を語りなさい。わたしたちは、互いに体の一部なのです」（エフエソ四・二五）。「互いに体の一部」であることは、自己の限界の受容だけでなく、各人の真実が取り替え不可能なものとの確信をも前提としている。さらに、聖なる怒りは、新たな暴力によつて暴力を終わらせる幻想とも無縁である。「怒ることがあつても、罪を犯してはなりません。日が暮れるまで怒つたままでいてはいけません」（四・二六）。怒りの命令は、「罪」・関係の破綻を回避するために必要不可欠であり、関係の内に再び身を投じたいと願うゆえの怒りを、永久に無意識の夜に飲み込ませないというのが、この箇所の意図なのである。つまり、聖なる怒りは、他者との関係を回復させるために、まさに発せられるのである。

レヴィナスにおける言語と他性

重松健人

レヴィナスは、ことばは思考と不可分なものだと考える。ただし、ことばとはそもそも私だけではなく、他者のものでもある。言語（langage）とは根源的に他者との関わりのことであり、他性をはらむものなのだ。このような言語における他性の